

# SINUSOID NEWS

## 肝類洞壁細胞研究会ニュース

第9号  
2007年12月発行

### 目次

- ・肝類洞壁細胞研究のあゆみとこれから…………… 谷川久一…………… P 1
- ・第11回肝臓学会大会を終えて…………… 有井滋樹…………… P 2
- ・瀉血の歴史…………… 和氣健二郎…………… P 3
- ・第21回肝類洞壁細胞研究会（松山）のお知らせ…………… P 4
- ・第14回国際肝類洞壁細胞シンポジウム（トロムソ）のお知らせ…………… P 4
- ・編集後記…………… 和氣健二郎…………… P 4

### 肝類洞壁細胞研究のあゆみと これから

代表世話人 谷川久一

第20回肝類洞壁細胞研究会は山梨県富士吉田にあるホテルハイランドリゾートで、山梨大学外科の藤井教授のもとで開催されたが、今回は20回という節目の会でもあり、また世話人会で、この研究会を今後も継続してゆくことが決められたことなどから、上記の題で特別講演を依頼されたわけである。代表世話人として、今までの研究会の今日に至るまでの経過と今後の展開について述べることは意義あることと考え、この講演をよるこんでお引き受けすることにした。この仔細はいずれ詳しく別に記述する予定であるが、ここでその一部をかいつまんで述べることにする。

この研究会の設立のきっかけは、第72回日本消化器病学会総会が市田文弘教授のもとで1986年（昭和61年）に開催された際、「肝疾患と肝類洞壁細胞」という特別講演を依頼されたことに始まる。この私の講演が多くの方々の関心を引いたことから、市田文弘教授の薦めもあって、1987年（昭和62年）第1回の研究会を久留米で開催し、以来今日に至ったわけである。一時は一般演題数も60題を超え、出席者も200名近いこともあったが、現在は20～30題の演題で70～80名の出席者で今日に至っている。

この肝類洞壁細胞は電顕下でない認識し難い小さな細胞であることから、この細胞研究は最初は形態学、ことに電顕的研究が主であり、本邦では電子顕微鏡の普及が早く、私自身は大学院での研究テーマが肝生検の電顕

的研究であったことから、この肝類洞壁細胞を早くから認識し、今日に至るまで肝疾患との関わりに関して興味を持ってきた。また、このような研究会が本邦に存在すること自身、これらの細胞は多くの本邦研究者に興味をもたれ今日に至ったわけで、その方面の研究は本邦は諸外国に比べて最もレベルが高い。

これら細胞の研究の仔細は紙面の関係であり述べる事が出来ないが、私自身の現在の興味は、これら肝類洞壁細胞が病態時にはphenotypic changeをすることで、例えばKupffer細胞でみるとphagocytotic activityが低下する一方、サイトカインの産生が高くなるといった変化で、このようなphenotypeの変化が病態とどのように関わっているかを明らかにし、この変化を診断や治療につなげることが大切である。

いずれにしても、この研究会は医学部の人々で形成されていることから、研究にも臨床との関わりが大切で、生物学的研究会でないことの認識が重要である。ことに現在肝疾患で重要なC型肝炎、NASH、肝移植といった分野で、この肝類洞壁細胞研究がことに重要で、それはとりもなおさず自然免疫の重要性を意味するものでもある。自然免疫は従来その研究が遅れていたが、近年Toll-like receptorなどの発見から、急速にこの方向の進歩が著しく、ことに肝臓はKupffer cell、Pit細胞など自然免疫に関わる重要な細胞が存在し、したがって肝類洞壁細胞研究は、とりもなおさず肝の自然免疫研究ともいえるわけである。第21回の研究会で恩地教授が、ことに肝の免疫を取り上げられたのは上記の理由をよく考えられていることに違いない。肝類洞壁細胞は今後ますます面白くなるに違いない。

## 第11回肝臓学会大会を終えて

東京医科歯科大学分子外科治療学肝胆膵外科  
有井滋樹

10月18-19日、JDDWの一環として第11回日本肝臓学会大会を主宰させていただきました。関係者各位に厚く御礼申し上げます。和氣先生からその裏話でもと指名されましたが、この場では表の話をまっすぐに述べることでお許しください。

2年前に会長に選任されたわけですが、私にとりましては全く想定外でした。私は常々、一寸先は闇と思っているのですが、万事思わぬ展開をするものと感じました。ただ、大変光栄なことであり、責任の大きさに多少の不安を抱きましたが、大きなチャンスをいただいたことを素直に喜び、感謝し、開催の準備にとりかかりました。といってもJDDWは事務局がタイムスケジュールを決め、会長はそれに従って物事をすすめていくという方式であり、すべてが早めに設定されており、最初の大きな、といいますが、ある意味ではすべてといってもよいかもしれませんが、主題の設定を2006年の7月に決める必要があります。これが正念場と考えました。春の総会はシンポジウム、パネルディスカッションなどが少なく、秋の大会がやたらと多いことになっています。たとえば前年の札幌では15の主題が組まれていました。従いまして、なんとか興味深い、意義深い、updateな主題を作りたいと考えました。そして、多くの聴衆が入る主題、外科医らしい主題、基礎と臨床が融合するような主題、内科、外科がともに参加できる主題、新規性のある主題、と欲張ってしまいます。すべてを満足させることは無理でしょうが、各々の主題はそのいずれかの特徴をできるだけたくさん満たそうと考えました。評議員の先生方のアンケートも大変、助かりました。正直に申し上げますと15のうち3つは完全にそれに従いました。それ以外は結構孤独に、しかもあまり過去の主題を事前に検索せずに考えました。その方が自分自身の色が自然とでるだろうと考えたからです。そして案を練ったあとに過去の主題を確認し、もう一度、バランスなどを考えるという具合にしました。次に重要なことは主題司会者の決定です。選挙で選任された演題選定委員と会長が選んだ専門委員が中心になるのが通例です。勿論発表そのものの質がもっとも重要ですが、その主題が輝くのは司会者の力量に負うところが大きいと考えます。輝きようのないテーマは会長の責任ですが、主題によっては私の意図を司会者にご理解いただくよう司会者の言葉をこちらで書かせていただきました。以上が主題に関するのですが、評価はいかがでしたでしょうか？ 国際シンポジウム以外はおおむねたくさん聴衆がおられたように感じ、安堵しました。

国際シンポジウムはLiver Transplantation for HCCというテーマでしたが、大きな第1会場におそらく70-80人くらいでしょうか。海外の招待者と日本のスピーカー同士がいわば顔なじみですので、発表者は楽しんでおられたようですが、主催者としては辛いものでした。司会者の市田先生（と幕内先生）には3時間の長丁場ありがとうございました。ただ、種々の企画をする場合に聴衆の少ないことはある程度予測できるものもあり、それを覚悟で行うこともあるわけです。実際にはこのようなものにこそ主催者の思いがこもっているのですが、この企画も負け惜しみではなく玉砕覚悟といえれば大げさですが、その類でした。ただ、メインと考える主題を大きな第1会場で行うということにこだわる必要はなかったと反省しています。一方、外科医である教室員が驚いていたのはB型肝炎、C型肝炎に関するシンポ、パネルディスカッションの聴衆の多さです。JDDWの事前打ち合わせにおいても1000人以上の大会場を埋めるテーマは消化器病のなかでは肝炎に関する主題だけということでしたが、予想通り超満員で、熱いディスカッションも繰り広げられていました。次に重大なポイントはポスター会場の雰囲気です。なんといっても次代の学会を背負う若い先生の発表はこのポスターです。ここで盛り上がり、肝臓学会で発表してよかったと思って欲しいわけです。本会はポスター発表の時には他の会場は基本的には閉鎖で、これは素晴らしい組み立てだと思います。幸い、大勢の若い熱気が溢れていました。

特別講演は2つで、藤堂省教授に「生命の贈り物一尊い意思を生かすために我々がしなければならないこと」を講演していただきました。その理由は肝移植はやはり脳死肝移植が王道であるという私の思いからで、豊富な経験にもとづいた脳死肝移植に対する思いが伝わった素晴らしいものであったと感じました。あと一つは藤原正彦様に「日本のこれから、日本人のこれから」というタイトルでお話いただきました。お願いするに、細いなりにもルートがあり、私どもの近くの大学の先生であり、そしてなにより「国家の品格」という強烈なインパクトのある本を書かれたということからお願いしました。事後、気持ちよく講演できたとの感想をお聞きしましたし、必ずしも手放しで喜ばませんが、この講演を聴くために参加したと言った先生もおられました。

私は常々、学会は参加するものであり、主宰するものではないと身勝手な考えをしていましたが、私の恩師の戸部先生から「有井君、君がお世話になった肝臓学会と肝臓学会に恩返しできてよかったね」と言葉をかけられました。なにはともあれ、演題を発表して頂いた先生方、参加していただいた先生方のおかげで無事に終えることができました。どうもありがとうございました。

## 瀉血の歴史

ミノファーゲン製薬 和氣健二郎

医学史を紐解くとき、瀉血ほど古く現在に到るまで永々と続けられている治療法も珍しい。紀元前3000年の古代エジプト王墓の壁にはヒル（蛭）に吸血させている場面が描かれている。紀元前5世紀にヒポクラテスは、体液は血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁からなり、その四体液の均衡が崩れると病気になると考えた。その思想を汲むガレノスは患者から悪い体液を除くために瀉血を奨励した。頻回瀉血の予定日を決めるために占星術と絡めた瀉血カレンダーが作られるほどであった。これに対して反ヒポクラテス主義の医師たちは瀉血に反対し、瀉血を吸血療法と揶揄したが、逆にガレノス一派からは血液恐怖症と非難された。当時の瀉血量は1回に100~1000mlで、静脈を切開して放血したので、現在も瀉血はvenesection, phlebotomy（静脈切開）と呼ばれている。ちなみに瀉血の「瀉」は「注ぐ」の意味で、「一瀉千里」は「一旦水が流れ出すと勢よく一気に遠くまで流れる」ことをいう。

中世になると瀉血はますます盛んに行われ、ヴェザリウスは解剖学的に瀉血にもっとも適した静脈を紹介している。オランダ・ライデンのプールハーフェは自然史的医学を発展させた18世紀を代表する内科医であったが、瀉血を飽くことなく続けた。パリのブルッセーは食事療法や下剤、発汗剤など穏やかな治療法を推進して名をなした医師で、患部をヒル（蛭）に吸血させる方法を奨励した。1863年にはパリのデイユー病院だけで年間128万匹のヒルが使用された記録が残っている。

当時の瀉血の意味は科学的とは言えないが、この治療法がこれほどまでも長く続いたことは、医師たちが瀉血によって病気が快方に向かう場合もあることを経験的に知っていたからだろう。また患者も「悪い血液が排除された」と信じて壮快感を味わったに違いない。この伝統的な瀉血も19世紀には冷静な医師たちによって初歩的ではあったが統計的にその意義が否定された。

1950年シカゴで開催された第24回臨床研究学会総会で、ニューオルリンズのDavisとArrowsmithがヘモクロマトーシスの患者3例に頻回瀉血を行った結果を発表した。この発表を期して、瀉血はEvidence-based medicineとして蘇った。慢性C型肝炎やアルコール性肝炎、NASHでも肝臓に鉄が沈着し、酸化ストレスの原因となって病状を悪化させ、治療効果を削ぐことが注目されるようになった。わが国では1994年以降、慢性C型肝炎に瀉血が行われ、2006年にはその保険適用が認められた。瀉血の歴史はそのまま医学史を物語るものと言える。

## 第21回肝類洞壁細胞研究会

(プログラムより抜粋)

平成19年 12月 22日 (土) 12:00~18:50  
23日 (日) 8:30~13:00

於：ホテル奥道後（愛媛県松山市）

Home page: <http://www.okudogo.co.jp/>

TEL 089-977-1111

FAX 089-977-5331

当番世話人 恩地森一

### 特別講演：

12/22 (土) 16:30~17:15

「がんに対する細胞免疫療法の現状と展望」

愛媛大学大学院医学系研究科生体統御内科学

教授 安川 正貴

### イブニングセミナー：

12/22 (土) 17:15~18:50

「肝癌の発生・進展とインターフェロンによる制御」

久留米大学医学部病理学教室

教授 矢野 博久

「医学研究におけるインビボ光イメージングの活用」

癌研究会癌研究所生化学部

部長 今村 健志

### シンポジウム：

12/23 (日) 9:35~12:45

テーマ「肝免疫の現在と将来」

### 基調講演

「自然免疫の基礎免疫学」

愛媛大学大学院感染生体防御学講座・

免疫学感染病態学分野

四宮 博人

### 事務局

愛媛大学大学院先端病態制御内科学 村上 英広

e-mail: LSEC21@m.ehime-u.ac.jp

TEL 089-960-5308

FAX 089-960-5310



## 第14回国際肝類洞壁細胞シンポジウムのお知らせ

14th INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON CELLS OF THE HEPATIC SINUSOID: Integrating Basic and Clinical Hepatologyは2008年8月31日から9月4日までノルウェーのトロムソ (Tromsø)にて開催されます。会長のSmedsrød教授から歓迎のメッセージが届いています。

本シンポジウムは肝類洞壁細胞の基礎的、臨床的研究の討議と交流の場を作ることを目的として開催されます。肝障害と肝再生、スカベンジャー機能と肝微小循環、腫瘍、肝免疫と炎症、老化のメカニズムなど、広範なテーマが取り扱われます。参加者による一般演題に加えて、招待研究者による講演も予定されています。

トロムソはヨーロッパ大陸の北端に位置し、トロムソ大学は世界の最北端にあります。高い山と深いフィヨルドからなる景観は目をみはるものがあります。トロムソでのシンポジウムを研究面だけでなく、歴史的社会的にも忘れられないものにするよう組織委員会は全力を尽くします。この機会に素晴らしいサイエンスと野趣あふれた環境を併せて楽しんでいただくことを期待し、お待ちしております。

会場はRica Ishavshotellです。宿泊はRica IshavshotellとThon Hotel Polarを予定しています。なお、抄録の締め切りは2008年4月1日ですので、お忘れなく。

詳細はホームページをご覧ください。  
<http://www.ischs2008.no/>

お問い合わせはischs2008@fagmed.uit.noにどうぞ。



Bård Smedsrød, PhD, Professor  
Department of Cell Biology and Histology  
University of Tromsø  
Chairman, International Scientific Committee and  
Local Organizing Committee  
14th International Symposium on Cells of the  
Hepatic Sinusoid



Tromsø

### 編集後記

今年も慌ただしく師走を迎えました。SINUSOID NEWSをすっかりご無沙汰させてしまい、申しわけありませんでした。実は私のメールが夏以来原因不明のまま機能不全に陥り、いろいろ手を尽くしたのですが、結局回復せず、あきらめて新しいメールを開設させていただきました。NEWS以外にも多くの方々に大変ご迷惑をおかけしました。何とぞご容赦ください。

今回は先日開催されましたJDDW 2007の開催を成功させられた有井先生から貴重な記事をいただきました。また谷川先生には急遽助け船をだしていただき、ようやく本号の体裁が整いました。

いよいよ今月22日から恩地先生の新しい企画のもと、「肝臓の免疫」を主題とする第21回肝類洞壁細胞研究会が、景勝の地、奥道後で開催されます。今年を締めくくる熱い再会を楽しみにしています。来年もよろしく。

(和氣健二郎)

### SINUSOID NEWS 編集部

編集長 和氣健二郎

編集委員： 谷川久一、内藤 真

〒107-0052 東京都港区赤坂 8-10-22

(株)ミノファーマゲン製薬 肝臓リサーチ・ユニット内  
FAX: 03-3402-6397

E-mail: kenwake@m2.gyao.ne.jp

印刷：肝類洞壁細胞研究会事務局（福田史子）

〒839-0864 福岡県久留米市百年公園 1 番 1 号

久留米リサーチセンター研究棟2階

米国公益法人 国際肝臓研究所内

Tel. 0942-31-1231, Fax. 0942-31-1232

E-mail: tanikawa@kurume.ktarn.or.jp